

平成 22 年 5 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520257

研究課題名（和文）チュニジアの文学状況

研究課題名（英文）Literary Situation in Tunisia

研究代表者

青柳 悦子（AOYAGI ETSUKO）

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：70195171

研究成果の概要（和文）：

チュニジアの文学状況について、チュニジアの現代史、社会背景、二言語併用状況、教育事情、文学史的背景、出版状況、作家の現状、作品内容などからその特徴を把握した。文献研究と現地調査とを平行しておこない、生きた文学状況を照らし出すとともにその問題点の析出に努めた。チュニジアの主要な作家のなかからとりわけ重要と思われるエムナ・ベルハジ・ヤヒヤの二作品を分析して、文学研究に新たな次元を切り拓くその価値を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

We carried out the Research on the Literary Situation in Tunisia by examining Tunisian Modern History, social background, bi-lingual condition, educational system, literary history, circumstances in publication, authors' state and their works. By doing investigation both in books and in the field, we brought out the actual situation of the Tunisian Literary World and pointed out problems underlying there. Among many important writers in Tunisia, we picked up Emna Belhaj Yahia and clarified the merit of her two novels regarded as innovative and significant works in Today's World Literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	660,000	3,960,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：フランス語圏文学、マグレブ文学、チュニジア、多言語状況、世界文学

1. 研究開始当初の背景

(1) ポストコロニアル研究の盲点

1980年代以降「ポストコロニアル」研究の隆盛とともに、いわゆる“第三世界”の文

学研究が盛んになってきた。しかし概ねそれらは旧宗主国と旧植民地との関係に焦点を置き、苛酷な支配の歴史と、20世紀後半に形を変えて延長された「新植民地主義」と呼ば

れる国家間搾取、そうした構造によってますます深刻化した民族対立などの内紛や女性差別などの社会矛盾を抉り出すことを目的としてきたといえる。こうした観点からは、植民地支配が相対的にみれば峻烈ではなかった地域、また独立後比較的穏便に成長を遂げてきた国は、文学研究の対象とされることがなかった。その代表としてチュニジアがある。「悲惨な第三世界」という常套化したレッテルやその裏返しである「素朴なパラダイス」というこれも常套化したイメージを超えて、世界の「列強」諸国とは別に、むしろそれなりのさまざまな問題をかかえながら、今日的社会が営まれているさまを、文学研究を通してその背景とともに探ることに大きな意義があった。

(2) 多言語状況下の文学

① アラビア語とフランス語の二言語併用地域の包括的な文学状況

現在すでに確立した概念となりつつある、「英語圏文学」、「フランス語圏文学」というカテゴリーは、暗黙裡にその言語名の由来となっている支配的国家を中心に位置づけ、その中心に対して衛星的な関係にある「周辺」としてその他の地域を位置づける立場と切り離せない。この見地から、おおむね多言語併用社会である「周辺」国家の文化・文学状況を見た場合、その地域の多重的な“全体”を等閑視し、きわめて偏った切り取り方をしてしまうことになる。チュニジアの場合は、ともに起源と中心地をよそに持つ「アラブ文学」と「フランス文学」の伝統が社会に根付いている。現地側の視点に立って、この両方の文学を視野に入れることで「～言語圏文学」という捉え方からすると分断されてしまう一つの文学状況を包括的に捉えることが必要であった。

② 非文字化言語を母語とする地域の現代文学

近代国家の理念上のモデルとするのは、国民全員が一つの統一言語で結ばれ、母語として用いるその言語を近代市民生活の文化言語としても用いるような一元的言語国家である。

チュニジアの場合①に述べた、公的言語としてのフランス語と（正則）アラビア語〔フスハー〕の併用という事実のほかに、文字にはされない母語のチュニジア方言アラビア語と、上記の“高等”二言語との併用という別の言語的多重性が存在する。しかしこうした多重性は世界的にみれば実はきわめて一般的な事態であり、またそれは、一見したところ一言語使用に思われても話し言葉と書き言葉の間には常に隔絶があることを考えれば、いかなる地域にとっても本来的な事態でもある。

「近代文学」は、内心の声の表現として“生まれつき話している”「母語」を、高度な社会的芸術言語として用いることを暗黙のうちに前提としてきた。

チュニジアでの文学活動に目を注ぐことは、「文学」と言語の“自然さ”との関係について再考する重要な契機となる。

(3) 文学活動の背景となる社会的要件の考察

「チュニジア文学研究」がこれまでおこなわれてこなかったのにはそれなりの理由がある。すなわちチュニジアの文学は、量的にも質的にも高度なレベルに達しているとはいえない。しかしある意味で文学が活発ではない国に着目することは、文学活動の要件を逆照射することにつながる。今日文学活動が「盛ん」で、文学活動というものが自明とみなされている国・地域では、むしろ文学はその内実において衰退しているともいえる。現在世界各地から生まれている注目すべき作家・作品を見ても、文学は、文学というものが自明ではない場所と環境から生じてくると言ってもよいかもしれない。

文学活動が成立する社会的な基盤を検討する契機とするとともに、作家の個別的な文学的営為がそうした不利な状況のなかから出現する瞬間を捉えるためにも、“文学的後進国”の文学状況は興味深い研究課題であった。

2. 研究の目的

上記「研究の動機」にしたがって、まず以下の3点を目的とし、さらに(4)を加える。

(1) チュニジア文学を「フランス語圏文学」ないし「アラブ文学」の一端、とみるのではなく、チュニジアという固有の場のなかで捉える。そのために、独立までの歴史的背景や、独立後の社会事情からチュニジアの特性を明らかにする。

(2) ①フランス語とアラビア語の二言語による文学生産の実情を捉える。

②「文学」生産の人為性などチュニジア独自の問題と、普遍的・理論的問題とを考察する。

(3) とくに教育言語の問題、文学教育体制の問題、出版や書物の流通に関する事情などを把握する。

(4) すぐれた作家の作品について研究する。

3. 研究の方法

(1) 多方面の文献研究によって、チュニジアの歴史や社会事情を把握する。フランスで出版・発表されている書物や論文のほかに、チュニジア国内の文献、およびインターネット上の資料も活用する。

(2) 現地で収集したさまざまな資料に基づいて、チュニジアの文学生産状況を捉える。

また現地での実地調査に基づいて、文学生産の背景を捉える。

(3) 優れた作品について、綿密なテキスト分析をおこなう。可能であれば作家へのインタビューをおこなう。

(4) 研究発表は、日本および、研究交流を兼ねてチュニジアでおこなう。

4. 研究成果

(1) チュニジアの歴史と社会背景について、以下のような概観を得た。

①「チュニジア」のアイデンティティ

第三世界の国々のなかでもチュニジアの特徴として挙げられるのは「国民」意識の高さであり、国家的なまとまりが強くみられることである。

この要因として ア) 古代フェニキア以来の文明の存在 イ) 言語的均質性および民族の混血による融合 ウ) 植民地支配以前の国家の成立 エ) 比較のおだやかな植民地支配（「保護領」の位置づけ） オ) 独立後の平和的発展などが挙げられる。

現在の「国民」意識形成の促進材料として特筆すべきこととして、ベンアリ政権のいくつかの政策が挙げられる。とくにカルダゴ以来の歴史の利用、1992年に始められた「連帯基金」に代表される国民の相互扶助意識の顕揚など。

②教育における言語の問題

独立前の非識字率は80%以上であったといわれるが、一方では、アラビア語とフランス語の二言語によって知的・文化的活動がおこなわれていた。

独立後はアルジェリアと異なって比較のおだやかなアラビア語化が進められた。

1986年のフランスのバスクワ法の施行（移民の制限）とアラブ主義の流れにより、90年代からより積極的にアラビア語化が進められ、99年には急進的といえるアラビア語化政策が打ち出された。

こうした変化によって、世代間の言語的疎隔感、とりわけ若年層の言語能力の低下などの問題が生じた。

③教育体制全般の問題

チュニジアは独立後の男女共同社会の実現と教育の普及を誇り、たしかに他国の模範ともなっている。しかし教育の普及がかえって質の向上を妨げている現実がある。

チュニジアでは学齢期の児童のほぼ全員が就学し、また現在では大学への進学率は50%を超えている。これは教育に対する純粋な価値付けによるだけではなく、国家的威信をかけて、ユネスコの調査対象ともなる就学率向上をめざしたという形骸的側面も否定できない。いずれにしても進学率の向上が、劣悪な教育環境を生み出し、教育言語の混乱ともあいまって、就学者の能力低下を招いて

いるという問題が無視できない。

また人口比率が極端に若年層に偏っていることと世界的また国内的な景気動向の低迷もあって、若者の失業問題が深刻化している。

こうしたことから現在、一般に社会的・文化的レベルの低下が指摘される。

④ヨーロッパ依存と中東世界への接近

歴史的経緯からも地理的位置づけからもチュニジアの国家・社会全体がヨーロッパ依存の体制から脱することができない。フランスやイタリアばかりでなく、独自のパートナーシップを世界の各国と結びつつあることが喧伝されるが、実態としてはきわめて微弱なものに留まる。経済構造の上でもまた人々の意識の上でも、ヨーロッパとりわけフランスの親権的な存在は健在である。

一方で、90年代以降フランスとの疎隔は顕著になってきており、その分、アラブ=イスラーム世界への傾斜が強まっている。このアラブ化はむしろ民族的アイデンティティの強化というポジティブな面を持つが、一方ではマグレブ地域独自の東西両文明への開かれという独自性の喪失、アラブ世界での周辺国化という位置づけによる自意識の損傷など、マイナス面も多い。

国民意識の現状はきわめて不安定であるにもかかわらず、経済偏重社会ゆえに（古代の栄光を除いては）文化的な自負が育ちにくく、盲目的な宗教的逃避の傾向も懸念される。

⑤海外居住と「チュニジア人」アイデンティティ

発展途上の国家では、優秀な人材は国外に活躍の場を求めることが多い。とくにチュニジアは言論統制が厳しいために文化人の国外流出がかなり頻繁である。世界的な「グローバル」時代の到来もあって、チュニジア人とは誰かという定義はますます困難である。

19-20世紀には、精神的な国家形成の手立てとして文学が大きな機能を果たした。しかし21世紀には、先進国においても“中進国”・発展途上国においても、文学がその機能を果たすことはなくなっている。しかし上に挙げたさまざまな問題は、文学活動を抑制するものであるとともに、（「国家」形成という動機に変わって）むしろ文学や芸術を希求するものでもある。

しかしながら以下に述べるように、チュニジアでは総体的にみて文学活動は活発ではない。

(2)チュニジアの文学事情

①文学生産の量的変遷

19世紀まではアラブ世界の一員として、この地域は文人・詩人などを輩出してきた。その場合エジプト（およびシリア）がおおむね

活動拠点となった。

19 世紀後半の短期間のチュニジア王国時代に、国立出版局の設置、新聞刊行などの活動が始まる。

植民地支配が始まってからはフランス語・アラビア語の二言語を中心とした文学活動が展開された。刊行書よりも新聞・雑誌への掲載あるいはラジオでの作品（シナリオ・詩など）が多く、資料の発掘・保存が現在のおきな課題である。

独立前はとりわけユダヤ人の文筆活動が活発であった。

独立後、フランス人・ユダヤ人が国外に退去すると、いったん出版活動は低迷する。

60 年代から公共（国立）の出版社（Société tunisienne de diffusion ほか）が創設され、さらに 70 年代後半に民間の出版社の活動を促進するために政府がさまざまな支援策を打ち出す。ア）出版用紙（輸入品）の非課税 イ）新刊（創作作品）発行の場合の国家による一部買取 ウ）文学賞の創設 など。

しかしながら現在に至るまで、年間の出版点数は 150 点程度（うち半数は学校教科書、ほかに政府関連文書も含む、また子供向けの簡易本が多い）であり、文学作品はフランス語・アラビア語それぞれ多くても 10~20 点。

②出版関連の事情

本をめぐる状況については、相互に関連する多数の問題がある。

ア）読者の不在・読書習慣の欠如：年配者の非識字率の高さ、家庭における読書習慣の欠如、教育が浸透した若者世代の言語能力の深刻な低迷。

イ）印刷部数の少なさ（1 点 1000 部以下から多くて 3000 部）による出版業の経営としての不成立。

ウ）執筆に専念できる作家・著述家の不在、および水準の低さ。

エ）信頼しうる出版社の不足：現在 80 社ほどあるが、年に 1 点出すだけの趣味的出版社が半数。恒常的な活動が展開されているのは 20 社に満たない。うち良質なものは 10 社以下。

オ）編集者など出版の専門家の不在と、編集行程の極端な長期化。

カ）印刷に必要な物資の欠如。インク、製本材料は輸入するか、印刷そのものを国外発注せざるをえない。新聞用紙は 100% 輸入。国内産の用紙は質に問題がある。

キ）書籍の価格の高さ。

輸入の書物は市民には高価（チュニジアでの販売では割引く二重価格制度もある）。国内出版物は部数が少ないのでやはり高価格になりがち。また市民は一般に書物への出費を好まない。

ク）書籍流通網の不在。

出版社から書籍販売店への流通システムがない。書物が出版されても販売にたどりつ

かないことも多い。読者はたとえ本の存在を知っていても入手できない。

ケ）書店（書籍販売店）の不在。チュニスに 3 軒。ほかの都市には 1 軒あるかないか。

コ）書籍に関する情報（宣伝・批評など）の欠如。

サ）大学図書館の不備

大学構内の書籍販売は廊下等の臨時売店方式が多く、常設のしっかりした書籍販売部がない。学生に読書習慣がなく、本も購入しない。そこで大学図書館が重要となるが、蔵書は貧弱な場合が多く、閉架式で使い勝手も非常に悪い。図書室・図書館は休憩所としてしか機能していない場合もしばしば見られる。

③書籍に関するさまざまな普及活動など。

十分な効果を挙げているとは言い難いが、他の発展途上国の模範となるような施策として、①で述べた以外に、以下のような活動が展開されている。主に文化省の管轄。

ア）公共図書館・図書室の設置。

60 年代から全国に整備。その数は 2007 年で 369 施設（うち移動形式が 29）におよぶ。蔵書数は総計 50 万冊を超える程度で、学童向けの比重が高い。また 1 箇所座席は平均 30 席以下と小規模。図書館司書の不在、都市部への偏りなどの問題がある。予算・スペースの問題から、小・中・高等学校内に図書室が欠如していることも重大な問題である。

イ）国立図書館（前身を引継ぎ 1965 年から）。

国内のすべての写本（4 万点）を移管。新刊行物を全て収集する方針（ただし遺漏が多い）。2005 年に大規模な新施設がオープン。蔵書 100 万冊。雑誌 1 万 5 千タイトル。

ウ）書籍市。

書店での書籍流通がほとんど機能していないので、一般に人々は書籍市に出かけて本を買う。最も大規模なものは毎年 4 月末~5 月初めにチュニスで開かれる書籍市（80 年代から）。30 カ国近くから 600~700 の出版社がブースを出店する。5 万人以上が入場する。

エ）2003 年「本の年」（「図書推進年」）。

政府の方針として書籍関連活動の活発化をめざして制定。書物関連のデータを総括するとともに、国民への図書の普及（目標は平均一人一冊）をめざした。図書関連情報を集めた Web サイト「本の世界」の構築は成果の一つ（<http://www.univers-livre.com.tn/>）。

オ）2008 年「翻訳年」。

2007 年に国立翻訳センターを設立。2008 年を「翻訳年」と定め、主に、チュニジアのアラビア語書籍の諸外国語への翻訳、諸外国語の書籍のアラビア語への翻訳を支援。50 点以上の翻訳出版がこの援助を受けて実現した。これまでおこなわれてきた新刊書に対してのみの支援の補完の意味合いがあり、また社会のアラビア語化に対応した施策である

(アラブ世界では初めての試み)。

カ) コマール文学賞

チュニジアの大手企業である保険会社コマールの文化事業。1997年創設。チュニジア国内・国外で出版された「チュニジア人」によるすべての小説を対象とする。フランス語部門とアラビア語部門があり、それぞれ大賞と新人賞、特別賞などがある。

(3) 作品分析

フランス語表現の小説について概観したところでは、チュニジアの作家はアマチュアレベルで、作品の完成度はあまり高くない場合が多い。言語表現として稚拙すぎるもの(誤謬も含めて)も散見される。一般にフランス語表現の小説は、軽い読み物の性格であり、探偵小説や、個人的な心象風景を吐露したエッセイ風の作品が目立つ。一方アラビア語表現文学ではまずは詩が中心。小説もあるが、評論や論説の方が活発。

そのなかでも、Ali Becheur (もっとも生産力のある作家)、Hédi Bouraoui (フランスとアメリカで教育を受けカナダ在住)、Azza Filali (女性作家、医師)、Mustapha Tlili (現在ニューヨーク在住)、そして Emna Belhaj Yahia (女性作家)などが挙げられる。

とりわけ Yahia の作品が、チュニジアの現実、その複雑な社会のありようを写しとりながらも、人間について、また現代社会についての普遍的な考察をも鋭くおこなっており、群を抜いて重要であると思われた。そこで、彼女の代表作である、『見えない宝庫』*L'étage invisible*, 1996、『タシャレジュ』*Tasharej*, 2000 について詳しく研究した。

論点は

- ・伝統的社会と現代生活との融合と葛藤
- ・間主体的な自己の存在の可能性
- ・世代間の相違：社会内存在の宿命として
- ・人間の日常における観念や抽象の本来性
- ・群像小説と視点の批判的ないし共感的移動
- ・アラビア語的言語感覚によるフランス語物語叙述の刷新
- ・日本語小説の叙述技法との比較など。

Yahia とは直接3回にわたって長時間の面談の機会を持ち、経歴、作家活動の展開の仕方、問題意識、作者からみた自作の特質、チュニジアの文学状況についての見解などを聞き、議論した。

(4) 本研究の意義と課題

チュニジアの文学作品について学術的観点から研究したものは少なく、とりわけ Yahia の文学を研究したものは先行研究としてフランス語および英語で計3つの論文があるのみである。

また日本においてはチュニジア文学につ

いての研究はまったく存在しない。チュニジアの文化事情についての研究もほとんどない。

そうしたなかで本研究は世界の文学研究の欠落の一端を埋めるものとなりえた。

チュニジア文学の総量は少ないが、しかし、優れた作品は出現しうる。そうした作品を見出していくことは文学研究の使命の一つであろう。マーケットの小ささ、既存の文学規範との不一致などの理由から埋もれがちな貴重な作品を紹介していく活動を今後も続けたい。一方、個人的営為の部分が大きい文学活動について、国家単位で区切って考えること自体を問い直すべきであるかもしれない。

また本研究によって、21世紀において文学はいかなるところから発生するのか、それを考えるための若干の視座を獲得することができた。

アラビア語表現文学については手がまわらなかったのが今後の課題としたい。また、これからは隣国アルジェリアの現代文学状況を研究しながら、チュニジア文学についても注視しつつ、マグレブ地域から見えてくる現代文学の様相をより広くまた深く考察する予定である。

本研究期間にまとめきれなかった研究成果は今後引き続き総合的なマグレブ文学研究のなかで発表していく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. Etsuko Aoyagi, Particularité et universalité dans les romans d'Emna Belhaj Yahia : selon la notion d'« exemplarité » de Jacques Derrida, Proceedings of the Tunisia-Japan Symposium on Society, Sciences & Technology: TJASSST10, Hamamet (Tunisia), 査読なし, November 2009, p.312
2. Etsuko Aoyagi, Sujet post-moderne dans les *Mille et une nuits*, à la lumière de la vision islamique du monde, Proceedings of the 8th Edition Tunisia-Japan Symposium on Society, Sciences and Technology: El Kantaoui Forum, 査読なし, March 2008, pp.31-33
3. 查柳悦子, 人間の空間としてのサハラ砂漠、筑波大学学内プロジェクト「北アフリカ地域の科学技術と文化に関する融合的研究」成果報告書『北アフリカ学へ向けて』、査読なし、2007年3月、p.29-43

[学会発表] (計4件)

1. Etsuko Aoyagi, Particularité et universalité

dans les romans d'Emna Belhaj Yahia : selon la notion d'« exemplarité » de Jacques Derrida, Tunisia-Japan Symposium on Society, Sciences & Technology : TJASSST10, 12 November 2009, Hamammet (Tunisia)

2. Etsuko Aoyagi, Sujet post-moderne dans les *Mille et une nuits*, à la lumière de la vision islamique du monde, TJASSST2007 : El Kantaoui Forum, 29 October 2007, Sousse (Tunisia)

3. 青柳悦子、チュニジア文学の現在、平成18年度第5回 ARENA 定期セミナー（筑波大学北アフリカ研究センター）、2007年1月11日、筑波大学

4. Etsuko Aoyagi, Identité relationnelle dans les discours littéraires : au-delà de la norme « européenne », TJASSST2006, 4 December 2006, University of Sousse (Tunisia)

〔図書〕（計1件）

1. 青柳悦子、新曜社、『デリダで読む『千夜一夜』』、2009年、610頁。

〔その他〕

ホームページ等

「筑波大学北アフリカ研究センター」

<http://www.arena.tsukuba.ac.jp/>

「マグレブ（北アフリカ）5カ国を知ろう」

<http://maghreb5.blog76.fc2.com/>

「Prof.Etsuko AOYAGI 青柳悦子のサイト」

http://www.geocities.jp/etsuko_ao/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青柳 悦子 (AOYAGI ETSUKO)

筑波大学・大学院人文社会科学研究所

・教授

研究者番号：70195171